

## 巻 頭 言

### 新たなる飛躍をめざして

理事長 浅井富雄

昨今の世界的な経済不況、社会的不安定という不利な状況下にもかかわらず、会員の皆様のご協力のもとに昨年7月 IAMAP 第6回大会が横浜国際平和会議場で盛會裡に開催されました。IAHS 第4回大会との合同ではありますが、世界各地から1,000名を越える参加者、とりわけ、これまでになかったアジア諸国から多数の研究者の参加が得られたことは本大会の大きな成果の一つであります。大会に出席できなかった多くの会員のためにも、本大会の詳しい報告を近々刊行される「天気」特集号に掲載しますので是非ご覧下さい。長年慣れ親しんできた IAMAP は横浜大会を最後に、今後は IAMAS (International Association of Meteorology and Atmospheric Sciences) として衣更えすることになりました。今世紀初頭、IUGG の気象分科会 (Meteorology Section) に端を発し、1930年 IAM (International Association of Meteorology), 1957年に大気物理学が加わり IAMAP に改名、WMO との分業体制がより明瞭となり、更に発展して今日の IAMAS に至りました。全く「名は体をあらわす」の通りであり感慨深いものがあります。

1988年に理事長をお引き受けして以来、本年度で3期6年になります。その間、国内、国外を問わず社会は目まぐるしく変動し、今なお混沌としています。気象学会もその影響から免かれ得ませんが、ますます多様化・高度化しつつある学会に対する内外の要望に長期的展望を持って適切に対応するため、特に心掛けてきたことは次の4点にまとめることができます。

#### (1) 学術水準の向上

社会的要請の強い研究分野のみならず、現在必ずしも脚光を浴びていない基礎研究や技術開発も含め、気象学の全分野に亘って広く研究活動を支援すると同時に、境界領域や新しい研究分野を積極的に開拓する努力をしてきました。研究分野の拡大や新技術の導入は気象学の進歩・発展に導く道でもあります。

#### (2) 国際協力の強化

特に力を注いだのは国際協力の強化であります。学会として寄与し得る国際協力・国際貢献はわが国自身の研究水準の向上と国内研究環境の整備が根本にあることは申すまでもありませんが、これまでのように、欧米先進国との交流に片寄ることなく、近隣アジア諸国との絆を緊密にすることであります。国際共同研究への参加も、これまでの追従型から脱却し、立案段階から積極的に参画し、一部先導的役割を果たすべき段階に入りつつあります。

分散型巨大科学といわれる「地球環境」研究において気象学はその中核の一部を占めていますが、その研究推進にあたっては国内外の多くの関係組織・機関の協力が必要となります。本来、研究は個人の創意と努力に負っていますが、地球環境研究をより効果的に促進するには各機関がそれぞれの機能を発揮しつつ壁を越えた協力体制が不可欠であり、今日、各方面でネットワークその他諸々の構想が練られています。学会はその触媒的役割を果たすことも考えるべきでしょう。

#### (3) 教育と普及

人材の養成はなにもものにもまして重要であります。研究者の育成は第一義的には大学等教育・研究機関の任務であります。日常の学会活動を通して、とりわけ若手研究者を支援すると共に、他方その裾野を拡大する教育・普及に努力しなければなりません。気象情報に寄せられる一般の人々の要望の多様化、気象予測技術の進歩、情報提供手段の高度化等の状況に鑑み、気象庁は昨年気象業務法の一部を改正し、認可を受けた気象民間企業において気象予報が行えるようにしました。これが円滑に実施できるよう、気象学会は協力しますが、気象学の教育と普及というより広い観点から夏季大学の拡充やある種の技術認定方式等についても検討しつつあります。

#### (4) 組織と運営

上記諸活動を推進するためにも、学会の財政的基盤を安定化し、事務体制を強化して足腰を丈夫にするこ

とが肝要であります。学会内外の要請に迅速・適切に対処し、必要に応じて指導力を発揮すべく柔軟かつ強力な運営ができるよう学会の組織・体制を見直し改善に努めています。

上記の4課題はそれらに対処すべき具体的施策や力点の置き所は時代と共に変わっても課題そのものに大

きな差異は生じないでしょう。

本年、新しい役員選挙制度のもとで選出される次期執行部にも、気象学・大気科学の新たな飛躍をめざして、会員の皆様のより一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

---

## 日本気象学会1993年度秋季大会の報告

日本気象学会1993年度秋季大会は、1993年10月26～28日に宮城県民会館と仙台市民会館で行われた。参加者数は488名(このうち予約参加者は224名)であった。

1日目午後には、山本正野論文賞・堀内基金奨励賞等の授与式に続き、大会シンポジウム「大気・陸面過程と衛星リモートセンシング」が行われた。

大会前日(25日)には、海洋学会との共催により、大気海洋相互作用に関する国際シンポジウムがイズミティ21で開かれた。また、これに関連した「TOGA-COARE」をテーマとしたスペシャル・セッションが26日に行われた。この他、個別のテーマによる研究会が会期中および大会翌日(29日)に計4件開かれた。

発表申込件数は315件(ただしキャンセルが数件)で、春季大会に続いて300件を超えた。その内訳は第1種講演が233、第2種講演が59、ポスターが23件であった。第2種講演として申込まれた講演のうち、予稿の書き方が第2種の要件を満たさない等の理由でプログラム編成時に第1種に変更されたものが11件(前回は14件)あった。

今大会事務局として大会準備・運営にご尽力頂いた仙台管区気象台と東北大学の皆様に深く感謝の意を表します。

1993年12月 講演企画委員会